The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	トリアーデ・自己否定への懐疑 : フィヒテとヘーゲルの弁証法
Author(s)	近藤, 良樹
Citation	カンティアーナ. 1992, 23, p. 47-69
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66706
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

トリアーデ・自己否定への懐疑

——フィヒテとヘーゲルの弁証法——

近藤良樹

一　トリアーデへの懐疑

ヘーゲル弁証法というと、即自—対自—即且対自のトリアーデがまずあげられるであろうが、このトリアーデ（三分法）は、カントの範疇表に負うところが大きい。ヘーゲルは、その『論理学』の質と量につづく段階である「度量 Maß」のところで、カントは量や質の下位範疇はトリアーデにしているのに、それらの全体となる量質自体については、これをトリアーデにせず、徹底していないと批判して、質と量にならぶものとして、「度量」という第三の範疇をおいて、トリアーデの徹底を自負した。

だが、はたして、諸範疇は、トリアーデの形式にうまくあてはまっているのであろうか。カントにせよヘーゲルにせよ、そうとうに無理をしているように筆者には思えてならない。カントは、自身のアプリオリで総合的な方法では三分法になるとして、各範疇綱において、対立的なふたつの範疇のつぎに、第三の範疇をあげる。量では一と多のつぎに総体性をおき、質では実在性・否定性のつぎに制限性を、関係では実体性と因果性のつぎに相互作用を、

様相では現実性と可能性のつぎに必然性（と偶然性）をそれぞれおいた。だが、第三項は、いずれも前二項にくらべると派生的である。量は、一と多だけですみ、質にしても、不可分な実在性と否定性の、制限性範疇とのむすびつきは弱いように思われる。関係も、相互作用は、因果性の特殊形式に還元でき、必然と偶然も見方によっては、可能性と現実性の関係様相として従属的なものともとらえられる。

では、カントは、なにゆえ三分法・三段階になるというのであろうか。かれは、その『判断力批判』（序説Ⅸ）に、アプリオリで分析的な方法では二分法になり、自身のアプリオリで総合的な方法のばあい、「制約 Bedingung」「被制約 Bedingtes」「被制約とそれの制約との合一 Vereinigung」となってトリアーデを構成すると論じている。またその『論理学』（§113）では第三のものを、制約からの被制約の「導出 Ableitung」と規定している。だが、「合一」でなるのが前二項にもとづく派生概念でないのなら、二項の総合的全体になる（つまり、実在性と否定性につづく第三の範疇は、制限性ではなく、質範疇そのものになる）のがふつうであろうから、第一第二と対等の第三のものとなることは、かならずしもいえないように思える。また、「導出」とは、第一項（制約）からの「導出」によって第二項（被制約）がなるということであれば、第二項の導出過程を示すだけのこととなろう。いずれにしても、カントの説明は、説得的でないように感じられる。カントのばあい、ふたつの範疇のあいだの制約・被制約（＝規定・被規定）というあり方をいうわけで、このペアでまとまっているのであって、つまりは、無理にもう一つくわえてトリアーデにしなくてもよかったのではないか（『実践理性批判』の第一部第一篇第三章（純粋実践理性の分析論の批判的解明）は、この理性の分析論が三段階＝トリアーデになる理由を、大前提―小前提―結論という推論の形式をとることにもとめている。悟性の範疇体系を、理性の推論＝媒介の論理をもって見なおしてよいとし

たら、さきのカントの「合一」「導出」は、「媒介」項（媒概念）という第三のものの自立化ととらえることができる。が、その範疇表の第三項の派生的副次的なあり方にてらしてみると、いきすぎた解釈となるように思われる）。

ヘーゲルは、範疇をさらにくわしく展開し、かつこれを徹底してトリアーデにしているのだが、ふたつのペアとなる範疇に比して、やはり第三の範疇は、むすびつきがよわいように感じられる。先の「度量」にしても、はたして質と量にならべて第三の範疇となるものかどうか。その論理学の全体は、有・本質・概念からなるが、現象（＝有）と本質の関係をもつ前二者たいして、概念は、かけはなれている。

トリアーデになるのは、ひとつの全体のプロセスが、「直接性」―「反省と媒介」―「自己還帰存在」（*G. W. F. Hegel Werke in zwanzing Bänden.* Suhrkamp Verlag. Bd. VIII, S. 179 以下、巻数と頁数のみを略記）の各規定をもつからだとヘーゲルはいう。それが、認識のあゆみとして、表象をまず前提し、これを分析して要素か概念といわれるような本質的なものを抽出して、その総合によって具体的な表象にかえって行き理解をふかめるというような主観的な展開ならば分かるが、ヘーゲルのいうのは、そうではない。それは、「認識の絶対的方法であり、かつ、内容自身の内在的たましい」（V, 17）だという。「論理的―実在的なもののモメント」（VIII, 168）として、「概念の内在的な発展」（V, 17）として、そうなるのだという。

目的論の世界、実践のばあい、主観のうちの抽象的な目的概念にはじまって、それを実現するために実在的手段へとでていき、その否定的なものをとおして、目的を実現し概念を現実化するということで、トリアーデになるであろう。が、それは、概念とはべつの主観・主体がそういう展開をしたのであって、概念自体がそうするわけでは

ない。いくら頭のなかで概念だけをこねまわしてみても、その三段にわたる展開は不可能であろう。しかも主観のうちの概念は、客観に実現された概念とおなじであるか、または後者は、妥協の産物としては、はじめの純粋な概念よりも、おとったものとなるのであって、概念の展開＝発展とはならないのではないか。

さらにヘーゲルは、ロゴス的なものは、抽象的悟性—弁証法的否定的理性—思弁的肯定的理性（Vgl. V, 16f., VIII, 168）というような三段階になるから、トリアーデになるともいう。だが、このヘーゲルの形式そのものが、むしろ二段階的、二分法的になっているのではないか。つまり、抽象的悟性と理性の二段階であり、さらに理性が否定（弁証法）的と肯定（思弁）的との二段階にみられているということである。

ヘーゲルは、肯定的なもののうちに否定的なものを見いだしていく。それは、展開としては二段階的な展開となる。それでひとまとまりになるのであり、もとにかえるという特殊なもの（循環・反復するもの）以外では、この二段階にとどめられるべきではなかったか。存在するものは、そのつぎの展開の萠芽を内在しうるであろうから、これをつかまえれば、つぎの段階は先行のものの否定ということで想定できるであろう。だが、そのさきの第三段階については、第二のものがまだ萠芽でしかないのだから、循環するもの、どうどうめぐりをしているものを別にして、とうていこれを推定することなどできないのではないか。

ひとつのものを二分して、あとで総合してという内実をもつばあいの三分法は、たとえばヘーゲル論理学冒頭のトリアーデ「有—無—成」でいうと、成のモメントは、有と無からなり、この有と無からその全体としての第三のもの、成へとすすむということでは、分析を前提した総合的な歩みとして常識的に理解しやすい（ただし、このばあい、成があって、その分析で有と無が見いだされ、この有と無を総合して成にかえるのであり、厳密にいうと「直

接的成→有と無→媒介された具体的な成」のトリアーデになるのである)。が、こういう主観の認識の展開としての総合的なあゆみではなく、存在＝概念そのものの内在的展開として第三のものをくっつけようというばあい、どうも世界は二分法的二段階的にまとまっているようなので、無理があってわかりにくいことにならざるをえない。質と量から、度量をというばあい、主観のあゆみとして総合的になら、第三のものは、有論全体になるのだから、「有」とすればよいのである。ところが、ヘーゲルは、そうではなく、ロゴス自体の内在的展開として、質的な量である「度量」をもってくる。質と量に匹敵する範疇ではないものだから、ヘーゲルもたいしたことはいえず、結局は、つぎへの移行規定をとりこまざるをえなくなったりしているのである。

『エンチクロペディー』や『論理学』あたりの目次をうかがってみると、ヘーゲルのトリアーデ構成の中身は、まずはなんといっても、(a)うえにあげた有—無—成とか、本質—現象—現実性のトリアーデのように、第三項には、先行の相関的な二範疇の総合された統一的全体をおくことが多い(実質的にはこれは、全体とその二モメントということであり、分析的二分法でしかない)。また、(b)自己還帰的円環の展開形式をとるのでつぎのトリアーデの第一項をさきどりしていれているばあいとか(a現象の世界—b内容と形式—c相関〔つぎは実体性や因果性の相関〕)、a理論的な精神—b実践的な精神—c自由な精神(つぎの自由意志＝客観的精神の先取り。一八一七、二七年の『エンチクロペディー』にはc(自由な精神)はない)、(c)無理やりに内在的移行をいうので詭弁をろうして移行規定には多言をついやさねばならないこともあって、まるまる移行規定に第三項をあてるばあいとかが見いだされる(たとえば、1比率的量—2実在的度量—3本質の生成、A絶対的無差別—B両因子の逆比例としての無差別—C本質への移行)。これらは、ヘーゲルに即していえば、第三項は前二項の統一的全体であるこ

とはいうまでもなく、さらに、自己還帰の螺旋的な円環をえがくからその第三項はつぎの第一項と重なるのであり、これをさきどりしていたり、移行規定がみられるのも自然なことなのではある。

だが、それ以外に、（d）第三項に、（カントのばあい、おおむねそうであったが）先行の二範疇にとっての派生概念、または第一第二項のペアからは異質の概念になるものをあげるばあい（たとえば、a意識そのもの（＝対象意識）—b自己意識—c理性（＝つぎの精神の先取りでもある）、a国内法—b国際（国外）法—c世界史）がみられるし、（e）さらに、第二第三項をペアとしたばあいもあって、そこでは第一項が異種的となり、両者にとっての基礎的なものをあげたり（たとえば、A地質的自然—B植物的有機体—C動物的有機体、a純粋量—b定量—c度〔bc項は、外延量と内包量を内容としている〕）、（f）なかには第一第三項をペアとして、第二項には、そのペアからはレベルのちがう異質の概念をあげているものまでがある（a定有一般—b質—cあるもの〔定有と、あるもの（＝定有するもの）がペアとなる〕）のである。ヘーゲルは、トリアーデ的構成について、そうとう無理をしているといわれなくてはならないであろう。

二　範疇は、二分法的でよい

ところで、シェリングも、カントから直接に範疇表のトリアーデ構成を受けいれて、やはり徹底してトリアーデですべてをまとめようとしているが、その第三項・第三段階は、第一、第二のものに匹敵しこれにならべられるような第三のものになるのではなく、第一・第二のものが存立しうる場・総合的全体をいうだけのものとなっているようである。反立しあう第一・第二のものが「絶対的＝同一的」（*Schellings Werke*. hrsg. von M. Schröter. Bd. I,

S. 351 以下、巻数と頁数のみを略記）となり、不可分的に存立するたんなる場を構成するだけなのである。カントの範疇表をとりつつも、そのために、たとえば、関係の「相互作用」範疇について、これは「範疇としては本来まったく無 gar nichts であり」「真の展開は、一、実体、二、原因、三、一者のうちでの実体と原因 *Substanz und Ursache in Einem* である」（V, 295）という。

もちろん、シェリングは、一貫してカント的なトリアーデの形式を尊重し、しかも、その第三のものも、たとえば「線—面—立体」とか「磁気—電気—化学的過程」「斥力—引力—重力」（II, 448f.）などと、第一第二に比肩できる新規なものをあげてもいるのではある。が、それでも、斥力—引力—重力のばあいなどは、はたらくのは斥力と引力のみで、重力という第三のものは、なんらのはたらきも示さず実質的には無にとどめられている。トリアーデにはするけれども、第三項は、第一第二項の存立の場をあたえるだけのものでしかないという、第三項のひくい位置づけは、範疇や世界の諸規定が二分法的であって、トリアーデになっていないことを感じてのシェリングの戸惑いだと見てよいのではなかろうか。

フィヒテのばあい、カントの先験的観念論を徹底して『全知識学の基礎』に自我の哲学を展開し、範疇導出を自我と非我からおこなっているが、その範疇表は、カントとちがっていて、トリアーデにはしなかった。そういう形式主義にはとらわれていないといってよい。まず、自我から実在性を、非我から否定性を導出し根源的範疇とする。つぎに自我非我の総合において「制限性」をあげるが、それは同時に「量」範疇そのものなのでもあった。そして、そのあとで関係範疇については、因果性と実体性のふたつをいうが、カントのいうような第三の「相互作用」はあげないのである（もっとも、関係即相互作用とみているのだが）。

かつ、その範疇の諸規定・諸モメントのありかたについては、二分法によっており、カント的な三分法はとっていない。たとえば、実体は、自立（独立的能動性）面と非自立（能動と受動の相互性）面にわけられ、「統合」（*Fichtes Werke*. hrsg. von I. H. Fichte. Bd. I, S. 205 以下、巻数と頁数のみを略記）と「共同」（I, 207）といわれ、さらに、おのおのも二分されて、たとえば「共同」は、質料面からは「可規定性」（I, 196）となり、形式面からは「相互排除」（I, 195）といわれるのである（ヘーゲルでも、相関の範疇をあつかう本質論はいうまでもなく、有論でも、実在性と否定、或るものと他のもの、あるいは、外延量と内包量、連続量と分離量など、二分法的であることが実際は圧倒的である）。

フィヒテは、定立—反定立—総合のトリアーデをはじめてつかって、このトリアーデで自我の哲学を形式づけたのであるが、かれのばあい、『基礎』にみると、定立は、全哲学のささえ・理念としてあげられるけれども、それだけで、あとの具体的な展開は、反定立—総合の二段階をくりかえす方法論をとっているのである。まず、一定の対立（＝「区別根拠 Unterscheidungsgrund」（I, 112）を発見して、それが矛盾する状態にあること、両項を反立しあうものととらえて、「反定立」として提示し、つぎに両項を媒介しうる「関係根拠 Beziehungsgrund」（I, 112）となる共通の「類概念」（I, 118）を、つまり新範疇をここに見いだすことで、矛盾の解決をおこなって、反立しあうものを「合一」し総合統一しようというのである。つまりは、定立ぬきの、反定立—総合（あるいは、矛盾—合一）の二段階において相対的なまとまりを見ようとしているのである（I, 114f.）。反立＝「分析」ともいう。対立するモメントを見いだしていくものとしては、分析となるのである。そして、共通の基礎的範疇を見いだして、そのもとに総合するのである。分析—総合の歩みである。

カントにしても、シェリングやヘーゲルにしても、三つの範疇をひとまとまりにしているけれども、どうもそのうちのふたつがかんじんのものとなって、のこりのひとつは、よけいなものになっているようにみうけられる。かれらのトリアーデをみていると、この世界の範疇は、ペアにおいて、対立的相関的なふたつの範疇において、ひとまとまりをつくっているといってよいのではないかと思われてくる。したがって、また、二段階的展開でよいように感じられる。フィヒテのばあいは、反定立と総合の二段階的展開からなっていて、二分法的だが（もっとも、常に二分法的なのではなく、ときにはトリアーデをいうばあいもある。絶対的自我の定立という理念・支えを反定立・総合のまえにあげるばあいがそうであり、反定立の二項を分けて、定立・反定立とし、総合へとつづけていくばあいもそういうことになっている（Vgl. I, 205f.））。カント・ヘーゲルのトリアーデ的構成も、思いきって二段階的二分法的に構成しなおしてみるべきなのではなかろうか。

三　自己否定と他者否定

ところでトリアーデの展開は、ヘーゲルのばあい否定のプロセスをもってとらえられる。定立が否定されて、反定立的段階になり、さらにこれが否定されて、「否定の否定」によってはじめに自己還帰しトリアーデになるというのである。この否定についてつぎに見ていこう。

無や否定性は、フィヒテにおいて弁証法的なものとなるが、この否定をフィヒテは、反立的な非我に由来するものとみなしている。独立的な非我＝物自体は、自我のそとにあって、これを触発し、これに抵抗する「障碍 Anstoß」であり、肯定的自我に根源的に反対して立っているものして、「反立し gegensetzen」「反努力し gegenstreben,

widerstreben」「抵抗する widerstehen」ものとして、自我にとり端的に否定的なのである。かつ、この非我の否定性が矛盾や反努力となって全哲学をうごかしていくバネとなっているのであって、「理論哲学で、（思考の）矛盾 *Widerspruch* によっているのとおなじように、ここ〔実践哲学〕では最後まで展開された自我の努力に対する、非我の反努力 *Widerstreben* によって体系は続行されなくてはならない」（*J. G. Fichte-Gesamtausgabe*, hrsg. von R. Lauth, Bd. II, 3, S. 266 以下、この全集からの引用は、F. G. をつけて巻数と頁数を記す）といわれるのである。このように積極的なものとしての矛盾や反努力からなる否定的非我は、だが、同時に、本源的に能動的な自我を中心にしてみたばあいは、たんなる無としてもとらえられる。非我の否定性は、いっぽうでは積極的なものとして「負量 *negative Grösse*」（マイナス）であり、たほう消極的には「無 *Nichts*」（ゼロ）になるのである（I, 110）。

自我のそとにあるものが、非我が否定の源泉であり、自我は、自身においてではなく、本源的には外から否定されるのである。こういうフィヒテの外的な他者・他在からの否定は、われわれの日常のばめんでふつうにみられるものであろう。自分は、ただしく、肯定されるべきもので、それは、そのままではけっして自己否定にはいたらず、そとから無理やり否定されることで、しぶしぶこれをうけいれるのである。内的改革・自己否定はむずかしいのである。内的にみえるばあいでも、それは、ふつう外からの圧力にせまられてはじまるのである。そのあとは、内的自己否定ということになるが、これも実際は、外的否定である。そのうちの一定の集団は肯定にまわり、べつの集団は、その全面否定にまわるのである。各個人もまた、その肯定か否定のどちらかにくみするのであり、否定は、他者の否定となって外的である。

だが、フィヒテの非我は、「自我が反立する」ものとしては、自我のうちにあることになる。『全知識学の基礎』の第三根本問題は、「自我は、自我のうちで可分的自我に可分的非我を反立する *entgegensetzen*」(I, 110)というが、このばあい非我は、絶対的自我の手のなかにあるのである。とはいえ、「可分的非我を反立する」のであって、絶対的非我を立てているのではない。自我から独立の絶対的非我に発したものの一部分を、その反立・抵抗・障害をうけいれて、みずからの自我に向きあわせているだけであろう。とすれば、非我の究極の源泉は、その絶対的非我は、自我のそとにありつづけるのではないか。むしろ、その点からいうと自我へ現前した表象としての非我をいう『基礎』の第二根本命題の背後において、自我によってはくみつくされず、自我のそとにあってこれを根源的につきうごかしつづけていく絶対的非我のあることがいわれるべきなのであろう。

『基礎』のフィヒテは、自我のそとに否定を位置づけたといってよいが、この否定をヘーゲルは、自我そのものの在り方のうちにとりこむ。自我＝肯定が同時に否定だというのである。自己否定である。フィヒテの絶対的な自我は神と解釈されることがあるが、ヘーゲルは、この神＝自我を肯定性のみにはとどめない。神は、創造的なものとして力であり、この力をヘーゲルは、否定ととらえて、生動的な神は、「否定的なものの規定」(V, 86)をもっているのだという。

フィヒテの『基礎』は、第一根本問題には、「自我は……自己自身の存在を定立する」(I, 98)といって、絶対的自我を生動的にその存在(Sein＝事 Tat)と定立活動(Setzen, Handlung)との同一性にとらえ、これを「事行 Tathandlung」と規定した。その能動的な定立の活動は、フィヒテ自身の規定では、「観念—実在論 Ideal-Realismus」のたちばからいって、「観念的」なものと規定されうるが、この観念的なものは、否定とは直結され

なかった。事行は、「主観—客観」ともいわれ、客観＝非我＝否定であれば、「主観—客観」は「肯定—否定」とおきかえ可能であるが、フィヒテは、そうはいわない。自我＝自我の事行は、「同一律」の根拠とみており、否定をふくむ矛盾（反立）律は、自我と非我の対立のもとにあげられる。自我の事行（定立—存在）＝（観念—実在）＝（主観—客観）は、それのそとに非我的否定性をみていたのである。否定は、自我のそとにその源泉をもっていたのである。

『基礎』の段階では、非我（＝否定）は勢力があり、絶対的な（第二）根本命題として自我への非我の反立がいわれているのであって、ここでは主体＝自我のそとに超然としている絶対的非我が背後にあるといってよいであろう。一七九三年の手稿では、神は非我のもとに位置づけられて、「絶対的非我は……神であろう」（F. G. II, 3, S. 65）とさえもいわれていたのである。それが、九八年ごろになる知識学（いわゆる『新方法による知識学』）では「静止した自我が、すなわち単なる客観と考えられた自我が非我となる」（F. G. IV. 2, S. 40）といわれ、非我は、自我の「事行」の「事」と等置されるまでになり、ここでは非我は、自我にくみこまれてしまっているようにみうけられる。非我の超越的絶対性は、おそらくフィヒテ自身においては、年ごとに小さくなり、自我のたんなる影でしかなくなっていったのであろう。

このフィヒテ自身のおもむいた方向にしたがって、あるいは、シェリングの同一哲学が、非我自然をもうちにとりこんだ無差別の根源から一元論的展開をしたのをうけて、ヘーゲルは、非我的否定性も自我＝神のなかにとりこみ、この始元を肯定的でかつ否定的なものととらえ、観念性・活動性をむしろ否定性のほうにになわせることにしたのである。ヘーゲル論理学冒頭の「有 Sein」は、「無 Nichts」とみなされるが、それは、肯定的なもの（〜

である sein）が同時に否定的なもの（〜ではない nicht）であり、この肯定即否定の自己矛盾が全体系のいわばアルケー（始元）になっているということなのである。ヘーゲルからいうと、フィヒテ的「反省」のたちばは、相関をみるけれども、外的に反省するにとどまり、その関係項を相互に外的なものととらえているだけである。が、ヘーゲルのたちばは、そうではなく、それをひとつのものの否定において、自己否定・自己矛盾・自己止揚においてとらえることになったというわけである。

四　弁証法的否定

ヘーゲル弁証法において否定は、生動性のよりどころとして特に重視されるが、この弁証法的否定は、カント・フィヒテをへて確立されたのであり、制限性範疇のよりどころとしてカントの求めた（否定的述語をもつ肯定判断としての）「無限判断」にみられる否定がそのひとつの先駆になったとみてよいであろう。「神は、不死である」という無限判断の「不死」のような否定的述語は、たんに「可死的ではない」というだけの消極的なものにはとどまらず、その主語が、否定的な述語の領域のそとの「領域に定立される」ものとして、積極的な主張をしているとカントはみた（『論理学』§22）。「可死的ではない」という否定判断は、「ではない」と述語を排斥し否定しているのみであるが、「不死である」という無限判断は、「不死」という述語を積極的に「である」と定立しているということである（ただし、その否定的な述語は、無規定的にとどまり、主語は「無制限の外延」におかれるのみで、「肯定的に規定されるということはない」のであった（『純粋理性批判』A72f.=B97f.））。

フィヒテにおいては、否定は、非我による否定として積極的なものとなった。否定は、「一定の非存在、一定の

実在性の否認」(F. G. II. 3, S. 40) として、「非Aすなわち B Nicht-A heiße B」(F. G. II. 3, S. 38) ととらえられた。つまり、否定を限定的規定的にみて、一定のものを排除している（非A、反A）のみであり、それ自体においては肯定的（B）で積極的なものだととらえたのである。フィヒテは、否定判断自体を、対立をふまえて「ポジティブ」なものだとみて、否定判断＝「対立定立 entgegengesetzte Position」として、ここには「反対 Gegentheil」が定立されるというのである（IX, 376, F. G. II. 4, S. 183）。『先験的論理学』にあげている例でいうと、「物質は、考えない die Materie denkt nicht」(IX, 376) の否定判断では、考えるという心の特性の「反対」が定立され、像・表象能力のない「多様のたんなる統一」がいわれることになっているのだと説いている。〝非Aならば B（～A∪B）になる〟と。〝AまたはB（A∨B）〟あたりが前提にあれば、たしかに、そうなるのであり〔選言的三段論法（A∨B）・～A∪B〕、われわれも、ぶしつけになることをさけ、おだやかにものを言うばあいなどには、そういうことをやっているはずで、「合格していない」といえば「落第している」ということなのである。否定性は、端的には、マイナスのはたらきとして、その一定の実在性Aにたいして、非A、反Aとして反立し抵抗し反発して、非A＝Bとして特定のもの（B）のかたちをもって、Aを拒絶する積極的なものになっているというのである。

他方、フィヒテの「無限判断」は、「述語の全領域を排除」したもので、たとえば、「神は考えない Gott denkt nicht」(IX. 376f.) の無限判断においては、神が、思考の領分をこえて（über）超越的なありかたをしていることを示すのだとみている。『基礎』では、「自我はある Ich bin」の「定立判断」を「無限判断」(I, 117) としているが、これは、bin のあとの述語が無限の展開をもつものとして、無限定なままにあけられているという無限判断であった。無限判断は、理想へと飛躍させるはたらきをもつ超越的な判断としてたかく評価されているのであ

る。

ヘーゲルも、「否定」は、「特定 *besonder* の内容の否定」「一定の事柄 *bestimmte Sache* の否定」つまりは「規定的否定 bestimmte Negation」としてあって、積極的なものとなっていることをいう（V, 49）。「無限判断」と「否定判断」の区別については、否定判断を、肯定的なものをもった一定の否定とし、無限判断のほうは、単に主述が乖離して無関係にされて、肯定的なものをもたないもの（いわば全面否定）とされている（Vgl. VIII, 324）。

たしかに、ふつうにわれわれがなにかを否定するのは、一定の否定である。だが、一定の否定だからといって即この否定のうちに肯定がのこされていると見るのは短絡的ではないであろうか。否定は、肯定的保存の面と否定的な面をもち、否定的側面（部分）のみを破棄しているわけであるが、その否定されるところは全面否定されるのであり、否定が一側面一部分というのではないであろう。ひとつの面は全面否定し、他の面には手をつけないということであろう。

いずれにせよ否定は、ヘーゲルにおいて弁証法的活動のたましい・根本形式となって、駆使されることとなった。ヘーゲル論理学は、その展開や区別を否定ととらえて、いたるところに否定をいうことになるが、範疇としては、有論の質的規定のところや本質論の反省規定のところにこれをあげている。質のところの「否定 Negation」は、実在性（Realität）＝有の背後にひそむものとして、その実在性の消極的な「欠如 Mangel」（V, 118）であったり、積極的な「拒否 Verneinung」（V, 118）の規定をもつ。有限な存在は、自己のうちに自己をほろぼすものを、その限界を内在しており、この内的な否定において「自己矛盾」して崩壊していくという（V, 138ff.）。この有論の

段階では、否定は、なおひかえめである。ものの実在性・有という積極的な規定のうしろにかくれているのである。前面に出るとすると、それは、自己ならざるものとしての「他のもの」において、そとに見いだされることになるのである。

だが、本質論では、否定は、「否定的なもの Negatives」として、肯定的実在的なものと対等になる。「肯定的なもの Positives」は、もはやそれだけではありえないのである。否定的なものを不可欠の相関とするのであり、むしろ、否定的なものが前面に出てリードしていくのである。肯定的なものと否定的なものは、まずは、「対立 Gegensatz」範疇でいわれるが、対立がなるのは、否定的なもののはたらきにおいてである。そして、そのつぎの「矛盾 Widerspruch」範疇においては、両者は一体とされて、したがって、非両立的に自己崩壊していくのだが、ここでも、否定的なものは、「措定された矛盾」（VI, 66）といわれ、顕在化した矛盾となって、矛盾をリードしていくのである。否定とは、対立することであり、矛盾することにほかならないのである。

なお、対立では、否定は、肯定的なもののそとにあって、外的な他者的な否定となっており、矛盾では、肯定的なものそれ自体が否定的なものとひとつであり、内的な自己否定となっているのである。万物は、実在的なものとして、否定を裏面にもったり、他者としてそとに見いだすのであり、また不可分の否定的対立的相関者という積極的なものをもって、これと対峙したり、自己否定につきうごかされて自己矛盾的に自己を展開していくというわけである。ヘーゲルにおいては、世界の生動性の原動力として、否定性がいわれることになったのである。

五　二重否定

ヘーゲルの否定の特徴は、さらに、二重否定において、自己還帰する形式をとることであろう。精神・ロゴスは、否定性の弁証法をもつが、それは、つねに自己還帰的な円環をえがくものとして、その否定は、再度否定されて、肯定的なものに帰るのである。実践の領域ではその概念＝目的の展開は、主観の目的をいったんはなれて、手段のなかへと自己を否定し、この手段を徹底していくことでこれの否定において、具体化し現実化した目的をみることになるから、否定の否定は、こういうばあいは、たしかにヘーゲル的に自己還帰してまとまりをうるのである。

ヘーゲルは、第一の否定は、「抽象的否定性」「否定一般」（V, 124）としてふつうの規定的否定だが、「第二の否定」「否定の否定」は、「具体的絶対的な否定性」（V, 124）で「無限的否定」（V, 270）になると規定している。絶対的とは、ひとりするということで、「自己自身」におけるということであろう。（否定的な）自己を否定することであり、否定（＝自己）を否定することであろう。「否定される否定 negierte Negation」が「絶対的否定」（VI, 24）である。「具体的」とは、一面的抽象的でなく、媒介をへて全体的になり充足したということで、否定の結果がそうなるような否定ということである。「無限」は、このばあい、そとへ限りなく向かうという悪無限的なものではなく、真無限的に円をえがいて自己にとじて充足したものということであろう。つまりは、「自己」のもとでの展開で、他から自立し充足した全体となるような否定ということである。第一の否定のばあいは、まずは他へむかい、自己をいったん離れようというのだから、一面的抽象的になるのである。第二の否定が同様にそういうものであったとすると、さらに自己からはなれていくわけで、円環的展開をするとみなされている精神の

展開としての第二の否定は、自己にかえり自立し自己完結して絶対的となり具体的なものとなるべきものとして、絶対的具体的否定でなくてはならないというのである。

第一と第二の否定は、否定の作用それ自体としてはちがいはないはずであるが、自己を中心にして考えたばあいは、第一の否定は、自己喪失・自己疎外・自己外化で、したがって第二の否定は、これを否定することとしては自己内化であり、自己還帰であって、その否定の意味は、まるで異なってくるのである。否定の否定は、外化したものが実はもうひとつの自己であることを確認して、自己獲得し、自己内化していくのである。自己否定・自己疎外において、その他在化したすがたのうちに自己そのものを見いだして自己にかえるのである。

第二の否定で還帰できるということは、第一の否定の結果がそれを可能にするのだから、極端なことをいうと、この第一の否定ははじめのものを真には否定していないのである。ヘーゲルは、第一の否定は、「第一の規定を自己に含んでいる」のであり、「第一のものは、本質的に他のもののなかでも保存され維持されている」という(VI, 561)。もとに帰れるように生ぬるい否定をしているのである。まさしく「抽象的否定」である。真には始元をふりすてていないのである。帰郷するつもりで、本質的なものは、そっくりのこしたままに旅立ったのである。抽象的な第一の段階で、第二の否定をとおして帰ることがよみこまれていたのである。

フィヒテも、円環的相互前提的弁証法をとっていて、範疇の展開において、諸規定が相関的になっていることを克明に論じている。ふたつのものが相互に前提しあうばめんにこれをいったり、四つの項が順次に根拠づけあうところで、「円環」になり「自己還帰する in sich zurückgehen」(I, 171) ことをいうのである。たとえば、関係一般の非自立面の形式(「連動」)と質料(「相関」)、自立面の形式(「移行」)と質料(フィヒテはこれについては明確

な表現をもたないが、いわば移行の担い手）などは、相関が連動を規定し、連動が移行を規定して、移行が移行の担い手を、さらに後者は相関を規定して円環をえがくと論じられているのである（Vgl. I, 170f.）。

この円環的な自己還帰の形式は、フィヒテのばあい、発展ではなく、たんなる反省の形式であり、反省としては、どこからはじめてもよい、「区別されたモメントのどれからでもすきなように出発しうる」（I, 170）と説いてもいる。相関的なものは、たしかにどちらからはじめても他方にむかい、かつ他方なしには、十全な理解はできないであろう。だが、フィヒテは、これらの形式については、「否定」とも「否定の否定」ともいわない。

自己還帰の弁証法的形式は、同時的な相互関係や、現実に円環をえがいているものについて大切な方法となるであろう。ヘーゲルは、この否定の否定＝自己還帰＝トリアーデを、発展そのものの根本形式とみなし、発展は、もとへ帰る形式をとるという。が、発展は、むしろそういう形式をのりこえることにあるのではないか。ひとは、さるから進化したが、ヘーゲル的にいうなら、ひとのさらなる進化は、さるに帰ることにある。だが、生物学では「進化不可逆法則」がいわれ進化ではもとにはかえらないという。祖先がえりしないかぎりで、進化し進歩したことになるというのである。進化・発展の形式は、反復・円環（の二重否定）の、いわば停滞・均衡の弁証法を脱して、これを端的に超越して否定するところにあるというべきではなかろうか。不可逆的前進の発展的な否定の弁証法は、直線になるのである。

六　自己否定とともに他者否定の弁証法を

否定は、ヘーゲルでは、根源的なところでは、自己否定である。自己否定的に、万物は展開するとみられる。神

は、自身のうちに自己を否定するものをもち、有は、それ自身が無＝否定そのものであるといわれる。自己否定の展開のあるのは、たしかであり、それを追求することができるものについては、そうしなくてはならないであろう。なにかを認識するばあい、それの肯定的な理解だけでは一面的抽象的にとどまるのであって、同時に、それを否定的に、それのもつ否定的な他面からもとらえてはじめて、その具体的生動性において、十全な理解がえられるのである。「Positives in Negatives 肯定を否定のもとで」（V, 52）というわけである（ただし、ヘーゲルの思弁的たちばは、（否定の否定＝）肯定を究極とするから、このことばの真意は、「肯定的なものを、それの否定的なもののなかで保持すること」（VI, 561）、否定を通して肯定をつかめといっているのであって、マルクスなどヘーゲル左派のように、肯定（＝現実）を否定せよといっているのではない）。

だが、否定的といっても、つねに自己否定的になっているわけではない。否定的なものは、生きたものとしてはそれ自身ひとまとまりの存在となって自立し、肯定的なものと外的に対立しあうことになるのである。あるいは、現実の否定は、しばしばそとから、他者からもたらされるのである。

自己を否定することは、むずかしい。そとの人からなら簡単に否定されても、自分ではできないものである。自己否定・自己批判にたよっていたのでは、その否定はなまぬるいものとなる。生あるものは、自己保存・種族保存を根源的な活動形式としており、あるいは、死んだ物質は、惰性的に慣性法則をもって同一性をたもちつづけるのである。つまり、その点からいうと、万物は自己肯定的なのであって、自己否定的ではないのである。高度な生物は、目的論的になっていて、手段へと自己否定できるが、それは、より高度に自己保存し自己肯定するためになされるのである。真に否定がなされるのは、そとからになるのではないか。この外的な否定は、きびしいものがあり、

自己は、そのことでまさしく否定されきって根絶されるのである。が、このそとからの否定の試練をくぐりぬけることができたばあいは、自己のみではとうていなしえなかったようなかたちで、自己を高く飛翔させることになる。外的な否定・強制を介して、これに応戦することがあってはじめて、めざましい進化・発展は可能となるのではないか。

弁証法（マルクス主義）をとっていた社会主義のこころみは、失敗してしまったが、その主体的な原因のひとつには、内的批判・自己否定にあまんじていたという姿勢もあげられるであろう。資本制のもとでは技術革新にやぶれた会社は、どんどんつぶれていく。そとからのきびしい否定をのりこえて革新はもたらされたのである。二度の世界大戦をもたらした血みどろの資本制が、先進諸国において、（必要悪以上のものではないとはいえ）もうしばらく生存できるような今日的なすがたになったのも、社会主義的外的批判をうけいれて、守銭奴の狂暴な本性に民主的なたがをはめ社会保障などに目をむけていったからであろう。社会主義は、その点、いつまでもふるいままの生産等の体制にとどまっていてそとからの決定的な批判・否定がくるまで、全体制はなかば反復するにとどまっていたのである。社会主義体制が、外的否定・外的批判をかたくなに拒絶する独善独裁のたいどをとっていなければ、外的否定を認めざるをえなかった軍事面ではひけをとらなかったように（ただし、それが国内的には、外的否定を排斥する独裁の道具となったのだが……）、あそこまで停滞したり、歴史の結論をずるずるとひきのばして国民を苦しめつづけることはなかったであろうし、ひょっとすると、資本制へと自己還帰することなく、飛躍して、資本制に衝撃（外的否定）をあたえるような方向を見いだしていたかもしれないのである。

フィヒテは、否定性を根源的には自我のそとにおき、それにもとづいて自我のうちにも、その否定性をみいだし

ていくことになるのであり、ヘーゲルは、本源的に精神そのもののなかに否定をみいだし、この内的否定が同時に外的な否定のすがたをもとっていくととらえることになるのであろうから、いずれも、内外の否定をもちうるのであるが、ヘーゲルでは内的な否定にかたむきやすく、かといってフィヒテは、なお否定性の弁証法にさして重きをおかないから、フィヒテ的な外的否定の観点をもちつつ、ヘーゲルの否定性の弁証法をとるとよいのであろうか。

内的な否定のみでも、外的な否定のみでもなく、両方がからみあっているのが現実であろうが、自己否定は、内在的、分析的で、けっきょくは同一的なところにとどまりがちであろう。自己同一的なもののなかでの否定だから、自己保存的否定で、否定の否定で自己還帰してしまう傾向をもつのである。これに対して外的否定は、総合的であり、非同一的、異質的であり、自己保存や自己への還帰はそこには見いだされないのである。否定性の弁証法が真に否定をもとめるのだとすると、外的な（他者からの）否定を、より根源的なものとして尊重すべきではないか。

フィヒテの非我的否定は、ヘーゲルの内在的な、もとにかえってしまう肯定的な「否定」とちがって、自我のそとからくるものとしては、きびしさがあるというべきであろう。自我の思いもしないようなかたちで、ようしゃなく、そとから自我は否定されることになるであろうからである。自我の自己同一性・自己保存を拒否して、これをつきうごかすのであり、ばあいによると、自我をつぶしてしまうのであるが、この非我的なそとからの否定に応戦することで、自我には、自己にとどまっていては予想もできないような発展・飛躍が可能となるのでもある。絶対的な非我は、自我をその外から触発し否定しつづける物自体であり、ひとを超越し、根源的にゆさぶりつづける大いなる神なのである。

付記　本稿の要旨は、フィヒテ協会第七回大会（一九九一年十一月二十九日　上智大学）のシンポジウム（テーマ「弁証法について」）において、「ヘーゲルとフィヒテの弁証法の差異」の題目で口頭発表した。

（広島大学文学部助教授）